

## 「核なき未来」 —核兵器は地球を守れるのか—

創価大学大学院 臨床心理学専修2年 白井朋世

「核兵器は国を守るために必要」という考えには、いったいどんな思いが込められているのだろうか。隣国の脅威におびえながら日々を過ごす人が自分の家族を守るために、自分が生まれ育ってきた国と文化を守るために必要だと感じているのかもしれない。将来起こりうる戦争に備えなければ、今を安心して暮らすことができないと感じている人が、必要だと思っているのかもしれない。他の国が持っているのに自分の国が持っていないなんておかしいと、不満の思いを抱えているために、必要だと思う人もいるかもしれない。核兵器は国を守るために必要だと思う理由は、さまざまであろうし、そう思う人は意外と増えているのが現実なのかもしれない。しかし、そうした考えによって、ないがしろにされていることがあるのではないだろうか。そうした選択をすることによって、逆に失われているものがあるのではないだろうか。

それは、人々の思いを「共有」する時間であり、自身や他者と「対話」を重ねる時間である。人と人との信頼やつながりを生み出す機会である。

自己防衛の手段を強化することは、国民を守るため、安心・安全な国を実現するための国家の義務であるという意見を耳にしたことがある。確かに、国民を守るためにはより強い手段を手に入れることが必要とされるのかもしれない。競争社会の中にいるのであれば、そのような考えになるのは自然なのかもしれない。それでは、国民を守るために必要な強い力とは、いったい何なのだろうか。

他国に負けない兵器を持つことなのだろうか。世界一の経済大国になることなのだろうか。

今この瞬間の不安を取り除くことだけを考えれば、こうした意見が一番現実的だと思われるのかもしれない。目に見える形で成果が現れやすいなら、なおのこと安心感につながるとも考えられるかもしれない。しかし、本当にそうなのだろうか。現代社会に生きる私たちは、あまりにも多くの、目に見えるものだけで、大事な選択をしようとしているのではないだろうか。

人は人の中で生きている。人は人とともに生きている。社会の中で生活している。その中で人々が共に生きていくためには、信頼という人間の心のつながりに裏打ちされた社会を目指して、人々が互いを理解し合う努力を重ねていくことが必要不可欠であると感じる。なぜならば、不信感に支えられた自己防

衛強化による安心・安全な社会の中では、他者がどんな考えをもっているのかが分からず、いつまでも不安と恐怖を抱きながら生きていくことになるからである。そこには、他者と時間を共有することもなければ、そういった時間さえも無駄であるといった認識が広がっているのかもしれない。それでは、安心・安全どころか、不安の種をどんどん増やし続けることになり、気づいた頃にはさらなる脅威の芽が出てきてしまい、自分ではどうしようもなくなってしまうというような状況に陥ってしまうのではないだろうか。

他者を信頼することは、他者を信頼する自分を信頼することにもつながっていく。  
自分を信じることを諦めないことは、他者を信じることを諦めないことにつながる。

人間は、思いを共有することができる。互いを理解しようとする努力をすることができる。そういった時間を、対話を重ねていくことによって、目には見えないが、確実に生まれてくる信頼という心と心のつながりが生まれてくるように思う。そうした努力をあらゆるレベルで行っていくことこそ、核なき未来の実現に向けて必要なことなのではないだろうか。もちろん、信頼や心と心のつながりは目に見えるものではないし、多くの時間と努力を要する労作業である。

しかし、そうした努力と行動の上に成り立つ人と人との信頼やつながりほど、人々に安心感をもたらすものが他にあるのだろうか。  
人と人との信頼やつながりほど、次の世代に受け継ぐことができる平和の基盤が他にあるのだろうか。

ここに、目に見えないものに目を向けることの重要性を感じる。  
核兵器ほど、人々の不安や不信感を前提とする兵器はないのではないだろうか。  
同時に、人と人との信頼や心のつながりほど、不安や不信感に打ち勝てるものはないのではないか。

核兵器を使用することも、使用しないことも、選ぶのは人間である。  
そうであるならば、目に見えるものだけでなく、目に見えないものも含めた議論が必要不可欠なのではないだろうか。私たちの地球を、そして未来を守ることができるかどうかは、私たちの選択によって決まるであり、核兵器によってもたらされるものではないのだから。